

本を紹介します

親と子と教職員の教育相談室 徳永 恭子

「ルポ 児童相談所」——一時保護所から考える子ども支援——

著者 慎 泰俊(しん・てじゅん) 2017年1月 ちくま新書

児童相談所併設の一時保護所は、虐待を受けた子どもや家庭内で問題を起こした子どもが一時的に保護される施設です。著者は、10か所の一時保護施設を訪問し、二つに住み込みこみ、子どもたち、親、職員ら100名に以上のインタビューを実施して、この本を作成した。まず子どもたちが保護される一時保護所とはどういうところなのか、そこで子どもたちはどう過ごしているのか、職員と子どもたちはどういう関係なのか、運営のルールはどうなっているのか、等をインタビューから明らかにしている。また児童相談所と児童福祉司数の関係や児童虐待対応件数と児童福祉司の推移などのグラフを使用して、児童相談

所の激務ぶり疲弊ぶりを書いている点は、福祉行政の貧困さがよくわかる。子どもの貧困、そして児童虐待への教育的対応、福祉的対応の現在と未来がよくわかる本である。

一時保護者にやってくる子どもの中で、発達障害と言われるこの比率が高くなっている。第一に、発達障害の子を育てる困難さによって親が虐待する場合、逆に親の虐待が子どもの発達障害と疑われるような症状を誘発する場合の両方を指摘している。児童相談所の視点から見ても、虐待と貧困は連鎖しており、近年その固定化が深刻さを増してきているという指摘はなるほど納得させられた。



『生きぬく力とは…』

千葉県教職員組合 山口 恵美子

最近、学校の教育目標の中に、“たくましく生きる力”とか“たくましい人間の育成”という表現がよく見られますが、“たくましく生きる”とはどういうことなのか、特別支援教育に携わって6年目のこの年に少しわかったような気がします。

私が担当する自閉症・情緒学級は、通級クラスで、本人の苦手教科のみ、自分のペースで学習したり、交流学級で悩みを抱えた時に気持ちの安定を図るために、この教室でクールダウンしたりすることもあります。中2のA君は、成績が伸びたことで苦手だった計算を、先生の力を借りずに自力で問題が解けるようになりました。しかし、“勉強が嫌だ”・“眠い”・“疲れた”と言って、家族や家庭環境のせいにしていきます。私自身も若い頃は、生徒指導上の問題をすぐに保護者や家庭に原因があると決めつけてしまうことが多々ありました。しかし、それでは解決策につながらないことが分かりました。一方、運動チック症と

音声チック症を合わせもつB君は、同級生とのトラブルから学級に行けなくなり、私の教室で一日の全てを過ごすようになりました。思ったことを良かれと思い、すぐに行動に移してしまう場面や判断に迷う場面が見られた時は、その場でわかりやすく、ゆっくり状況を説明します。彼は、時には落ち込むこともありましたが半年間でのこの教室での経験を通して気持ちをコントロールし、多少の困難にも耐えられるくらいに成長しました。

教師が、どんな生徒も、ありのままの彼(彼女)をI'm OK.と認め、本人が、無理なく、自然なままの自分でいいのだと自覚できれば、困難に負けない強い自己が実現でき、大きな一歩を踏み出していけるのではないかと思います。時代が変わっても、いくつになっても、“生徒の生きぬく力(生きていく力)”の存在を信じて、これからも日々、ワクワク感をもって生徒とかかわっていきたくて改めて思います。